

概念に媒介される教育的関係性

—ジル・ドゥルーズの「口さがない批評家への手紙」に着目して—

松枝 拓生

1. 序論

本稿は、ジル・ドゥルーズ(Gilles Deleuze 1925-1995)の著した書簡であり『折衝』(*Pourparlers*)と題された論集¹に所収の「口さがない批評家への手紙」(“Lettre à un critique sévère”) (以下「手紙」と略記する)を中心に扱い、そこからドゥルーズ思想に内在的な教育的関係のイメージの一つを取り出す試みである。

「手紙」は本稿でも主題の一つとなる「本の二通りの読み方」が語られるテキストとして有名であり、「本の二通りの読み方」はドゥルーズ思想の読み方を指し示す指針として理解されてきた²。同時に、「手紙」は従来、ドゥルーズの議論嫌いや独善性という主観的態度を示す事例として参照されてきた。例えばデイヴィッド・ハリスは「手紙」におけるドゥルーズの言辞に「軽蔑的で人を見下すような」(dismissive and patronizing)態度を見出す[Harris 2013: 156]。解釈と議論の回避という、一般に流布したドゥルーズ像ゆえに、「批評家への手紙」は、もっぱらそうしたイメージを再確認し再生産する手段となってきたように思われる。ドゥルーズ理解の簡便な指針として、「手紙」はそれ以上の考察の対象としては必ずしも扱われてこなかった³。

しかし、ドゥルーズによる「対話」(dialogue)一般のもつ権力作用批判や、支配的な秩序を攪乱しそれに抵抗する技法についての積極的評価を踏まえて「手紙」を読み直すならば、再生産されてきたイメージとは異なる像を「手紙」に結び、そこから積極的な教育的意義を敷衍することが可能である。本稿は、批評家との関係や、ドゥルーズの応答の仕方とそこで提示される概念の関係といった、「手紙」の内外の布置関係に着目することで、ドゥルーズが積極的に提唱する思想が彼自身の手によって実践され実験されている場として「手紙」を読み直す。

とはいえ、あらかじめ断っておけば、本論で論じるように著者の意図という発想自体が問いに付されることになる。本稿の趣旨も、「手紙」をドゥルーズ思想の実践の場として見立てるものではあるが、ドゥルーズの動かしがたい本当の意図を発見しようと目論むものではない。むしろその主眼は、著者の手を離れた概念の数々に触発されつつ、それらの概念の創造的な組み合わせを実験してみることにあり、本論でドゥルーズの提唱する「作動配列」として論じられるものに即したものである。それゆえこの試みは、ドゥルーズの概念についての思想を自ら実践してみせるという意味でドゥルーズ思想に対して忠実であろうとする、構成主義的な読解として位置づけられるものである。

まず2節でドゥルーズの「対話」批判を概観し、問いと応答からなる構図にドゥルーズが見

出す権力作用を確認する。3節では、「手紙」の「対話」的構造と批評家の解釈への固執を示すことで、「手紙」において「本の二通りの読み方」を語るという行為が「対話」の権力作用に抵抗する「折衝」として読み取れることを論じる。4節では、「実験的な読み方」と「折衝」の連関を明らかにするために、ドゥルーズによる「裏切り」および「作動配列」の概念について確認する。それらを踏まえ5節では、「概念の教育学」という思想を概念の自律性という観点から読み解くことで、「批評家に対する折衝」に見出されうる実験的教育の可能性を明らかにする。それは、次々に創造されゆく概念との関わりを通じて、概念の創造者、受容者がともに新たになしうることを獲得してゆくようなプロセスとして理解されうるだろう。

「対話」を「折衝」へと折り返すという試みが、ドゥルーズによって肯定的に語られる「裏切り」や「作動配列」の実験性によって裏打ちされていることが明らかになるだろう。ドゥルーズは後年、そうした実験性を概念と教育を結びつける形で提示し直すのだが、そこに見出される教育の意義が「折衝」の試みから敷衍されることが示されることになる。

2. ドゥルーズにおける「対話」(dialogue)

ドゥルーズは「対話」(dialogue)を行うことに批判的だったことで有名である。彼が「対話」と呼んで忌避したものは例えばインタビューであり、テレビプログラム、ラジオなどのマスメディアが手がける討論である。スラヴォイ・ジジェクはそのドゥルーズ論の導入を「ドゥルーズは議論嫌悪で有名である」という一文で飾り [Žižek 2004=2004: ix=7]、アラン・バディウはドゥルーズの議論嫌いを「貴族気取り」(aristocratique)だと評する [Badiou 1997=1998: 30=29]。また前出のハリスはドゥルーズが「自らの考え方を他の哲学者との開かれた討論の中で検証するのを嫌がった」[Harris 2013: 156]のだと指摘する。彼らは一様にドゥルーズに傲慢で善悪的な態度を見てとっているのだが、果たしてことはそう単純なのだろうか。以下ではドゥルーズの「対話」批判の趣旨を確認する。

ドゥルーズが「対話」に批判的な態度を取る理由は、それが問いを受けて応答するという形式をとることと関わっている。「対話」における問いと応答の関係に、ドゥルーズは一種の権力関係を見出すのである。その観点の要諦が表れた文章を引用しよう。

語調がどんなものであれ、問いと答えというやり方は二元論に滋養を与えることになる。例えば文学のインタビューでは、まずインタビューする側とされる側という二元論があり、それから、それを超えて、人と作家、インタビューされる側の生活と作品という二元論があり、さらにまた、作品とその意図ないし意義という二元論がある。討論会や円卓会議であっても、事情は同じようなものだ。二元論はもはや諸々の単位に関わっているのではなく、次々とやってくる選択に関わる。[...] 二進法の機械がつねに存在し、それが役割の配分を取り決め、全ての答えはあらかじめ形成された問いを経由しなければならないようになっている。なぜなら、問いは支配的な意義に従って、そうであろうと想定された答えにもとづいてすでに計算されているからである。こうして鉄格子が構成され、これを通過しないものは全て現実的に理解されえないことになる。[D: 27-28=39-40]

ここで述べられていることを端的に要約するならば、問いというものは往々にして応答者の応答の仕方をあらかじめ制約してしまうのだということである。それは応答者に期待される応答のスタイルをあらかじめ密かに与え、それによって別の応答のスタイルを封じ込める。問いはあらかじめ何らかの特定の答えが、ある特定の仕方ですべて返ってくることを想定しており、質疑は期待される答えが導かれるように設計される。それゆえ必然的に、応答は問いが依拠する規則に絡めとられる。そしてこのことがとりわけ先鋭な問題となるのは、「対話」が聴衆や読者へと開かれているからである。聴衆を前にした討論であれ、後に書簡として公開される対談であれ、質問者の問いの立て方が設定する「対話」の土俵は何よりも聴衆や読者の思考を枠づける。

例えば、ある書物の著者に対して「あなたはこの作品を執筆するにあたってどのようなことを意識したのでしょうか」という問いが投げかけられるとしよう。この問いは、書物が執筆される背景には著者の明確な意図が存在するのだという想定に則っており、著者にもこうした想定が共有されるのだという期待感が伴う。先回りして選択肢を提示することによって、より応じ方を制限するような問いもありうるだろう。「あなたが意図したことは A でしょうか、それとも実は B なのでしょうか」といった形である。質問者がこのように問うのは、ひょっとすると当該の書物がすでに多くの注目を集めており、読者の間で「二進法の機械」に沿って喧々諤々されているからかもしれない。質問者は、世間の議論を一定の仕方ですべて規定している規則を斟酌した上で、著者にもその流通する規則に枠づけられた応答をすることを、言い換えれば迎合することを期待する。質問者自身がそうした期待に無自覚でも、問いとして発せられた言葉は「司令語」(mots d'ordre) [D: 30=44] として、発話者の意図を超えて、人々の言語使用を、ひいては思考の方向性を規制する力をもつ。もし当該の書物がまさに「意図」という発想そのものを問いに付すものであったとしても、悪気なく素朴に意図を問う質問によって「対話」の土俵が先取的に設定され、意図など存在しないかもしれないという可能性への批判的想像力が聴衆や読者の思考から締め出される。その書物が「意図」という発想を回避することで切り拓こうとした地平は、容易に見過ごされることになる。こうして質問者は聴衆や読者の期待を汲み取り、他方で聴衆や読者は質問者の問い方を再撰取する。こうしてドゥルーズが「二進法の機械」と呼ぶ支配的前提が流通し続け、応答者はマイノリティの立場に置かれることになる。

「自分を説明する[s'expliquer]」ことは難しい——それがインタビューであれ、対話であれ、対談であれ。私が問いを受けるとき、たいていの場合、それが私に関わるものであっても、私は言うべきことが厳密には何もないことに気づくのだ。[D: 7=9]

問いによっていったん暗黙の前提が設定されてしまえば、その「対話」の関係はそうした前提によって支配されてしまう。自ら語り出すことによってしかうまく解きほぐす(expliquer)ことのできないような、自らの思想に特有のテクスチャー＝肌理、独自の言葉の折り重なり、すなわち「襷」(pli)をいかに語りうるのか、しかも支配的な前提に抵抗しながら語りうるのだろうか。実のところ、こうした問いの権力作用に抵抗する「折衝」(pourparler)を遂行すること、これがドゥルーズにとって肝要である。つまり、ドゥルーズが「対話」批判を行うのはコミュニケーションの形態に伴う権力論という文脈においてのことであり、彼の個人的嗜好へと矮小化

できない射程をもつのである。これを踏まえて次節では、「手紙」を「対話」批判の射程から再読解することで、「手紙」の意義を再評価することを試みる。その際、ドゥルーズの「本の二通りの読み方」という概念が再読解の鍵となる。

3. 「口さがない批評家への手紙」

執筆の経緯

「口さがない批評家への手紙」が執筆された経緯を確認しておこう。ことの始まりは自著の出版を目指す批評家を書き下ろしの原稿を求めてドゥルーズの元を訪れたことである。それに対してドゥルーズの提示した条件は、直接の対談ではなく手紙のやりとりをすること、批評家の著書本体とは区別して、あくまで付録として公表することだった。ところが批評家は申し合わせを歪曲し、ドゥルーズに難癖をつけた手紙を送ってくるようになる [PP: 11-12=11-13]。当の出版計画はドゥルーズ自身の金銭欲と出世欲によるものだとする歪曲や、ドゥルーズは実のところ仕事の面でも家庭の面でも追い詰められているという根拠のない決めつけが綴られていたとされる。実際にこの「批評家への手紙」は「ミシェル・クレソール著『ドゥルーズ』(1973年)に所収」[PP: 23=31] されることになる。

着目すべきは、批評家がドゥルーズへ宛てた手紙で取る態度である。そこで批評家は、あたかもドゥルーズの内面を見透かしているかのように振る舞う。彼は、ドゥルーズが仕事やプライベートなど、「あらゆる方面で行き詰まり、実生活でも、教育の現場でも、さらに政治の場面でも追い詰められている」と「決めつける」態度をとる [PP: 11=11]。あるいは「「甘く見るなよ……。あなたのことを本に書いているんだぜ、見せてやろうか」と凄んでみせる」のである [PP: 12=13]。以下はドゥルーズの言である。

きみはあれこれ口調を変えながら、繰り返しこう述べている。あんたは行き詰まった、あんたはもうおしまいだ、白状したらどうだ [avoue-le]、とね。きみは検事総長にでもなったつもりかい。私は何も白状しないよ。 [PP: 14=16]

ドゥルーズにとって批評家は「相変わらずの挑発行為やすっぱぬき、質問状や（「白状しろよ、白状しろったら……」 [avoue, avoue...] と迫る）公の場での告白から脱け切れていない」ように映るのである [PP: 19=25]。

本の二通りの読み方

白状せよという要求を明確に拒否する一方で、ドゥルーズは当の手紙において自身の思想背景や執筆物についての自己理解を開示することで応答する。なかでも興味深いのは、ガタリとの共著である『アンチ・オイディプス』の社会受容に触れながら提示する、「本の二通りの読み方」である。問題の手紙のやり取りがまさに『アンチ・オイディプス』のセンセーショナルな——当時のフランスで優勢であった精神分析的見地からの痛烈な批判を引き起こすような——登場を受けて開始されたことを踏まえれば、批評家への応答として執筆されたこの手紙の核心部の一つであると言えるだろう。

つまり一冊の本を読むには二通りの読み方がある。一つは本を箱 [une boîte] のようなものと捉え、箱だから内部 [un dedans] があると思ひ込む立場。これではどうしても本のシニフィエを追い求めることになる。この場合、読み手がよこしまな心をもっていたり、墮落していたら、シニフィエの探究に乗り出すだろう。そして次の本は最初の本に含まれた箱になったり、逆に最初の本を含む箱になったりするだろう。こうして注解が行われ、解釈が加えられ、説明を求めて本についての本を書き、そんなことが際限なく続けられるわけだ。もう一つの読み方では、本を小型の非意味形成機械 [une petite machine a-signifiante] と考える。そこで問題になるのは「これは機械だろうか。機械ならどのように機能するだろうか」と問うことだけだろう。読み手にとってどう機能する [fonctionner] のか。もし機能しないならば、何も伝わってこないならば、別の本にとりかかればいい。こうした異種の読書法は強度による読み方だ。つまり何かは伝わるか、伝わらないかということが問題になる。説明すべきことは何もなく、理解することも解釈することもありはしない。電源に接続するような読み方だと考えていい。」 [PP: 17=21]

前者の読み方は、ある言葉や概念にはあらかじめ定まったシニフィエがあり、それに到達することができるという発想に依拠する。それは対象を精査すれば自ずとその唯一の意味内容にたどり着くことができるという考えであり、ドゥルーズが「客観主義」と呼んで批判し続けてきた思考様式である。客観主義とは「我々にとって自然な、あるいは少なくとも習慣的な」傾向であり、そこで「知性はそれ自身によって発見し、受け取り、伝達することができるような、客観的な内容を、明白な客観的意味作用を夢想する」 [PS: 39-40=37]。こうした傾向に依拠する限り、人は本を「箱」とみなし、状況の特異性に翻弄されることのないその客観的な「内部」を想定する。そして箱の内部に詰まっているはずの中身を詮索し、そのただ一つの意味内容を確定させようとするだろう。

それに対して後者の読み方は、本に客観的な「内部」を想定できるとは考えない。後者の読み方は、本と読者の関係が偶然へとひらかれていることを想定している。というのも、こうした読み方を特徴づけるのは「流れと流れのせめぎ合い、[...] 実験 [expérimentations]」であり、書物とは何の関係もなく書物をズタズタに切り裂く各々にとっての出来事 [événements] [PP: 18=23] だからである。すなわち、こうした読み方は書物をそれ自体で完結した閉塞世界とみなさない。閉じた箱は「切り裂かれ」外部との関係にひらかれるのである。本が置かれる特有の環境に生じる偶然的な「出来事」と交わることで、本はその都度異なる形で機能する。こうしたことを理解することで、本の紋切り型の意味内容にとらわれることなく、本がその都度の特異な状況においてどのように読み手を触発するのかをためす「実験」的な読み方が可能になる。

『ディアローグ』所収の「英米文学の優位について」において、ドゥルーズは二通りの読み方をそれぞれ特徴付ける性格を、フランス文学と英米文学の作法の対比によって描き出している。それによれば前者の読み方と通底するフランス文学は「解釈症」(interprétose) [D: 58=84]、『不潔で小さな秘密』への偏執 [D: 58=83] を抱え込んでいる。眼前に提示されたテキスト

は隠されたシニフィエを持っているはずだから、そのシニフィエをむき出しにしてやろうという偏執、隠されたものをのぞき見ようと解釈せずにはいられない病理として、ドゥルーズは前者の読み方を描写する。隠された秘密の存在を信仰できるという意味で、こうした読み方はテキストとその意味が整然とした秩序を保ち、有機的に組織化されていることを前提とする。他方、英米文学はフランス文学がとらわれているような秩序を逸脱するような作法で執筆されるという。それは、「登場人物と著者はつねに小さな秘密を持っている」という考えに滋養を与える秩序、「支配的な意味作用の世界と既成の秩序に対する裏切り者 [Traître]」[D: 53=75]である。「裏切り者」(le traître)とは秩序を攪乱する者のことである。裏切り者は、有機的組織を解体した「実験」を引き起こす者のことであり、新しい秩序を導入し支配権を乗取る目的で混乱を引き起こす「いかさま師」(le tricheur)とは対照的である [D: 53=75]。

手紙における布置関係

本の二通りの読み方は、客観主義的に、有機的秩序に裏打ちされた内部を夢想する偏執的な読み方と、置かれた状況、かかわる出来事との関係に応じて本が異なった機能をはたすという観点に立つ読み方との、対比をなすことが確認された。その上で改めて、この「本の二通りの読み方」がまさに批評家へと宛てた言葉として綴られているという事実に着目してみたい。そこには、何らかの必然性があるのではなかろうか。

ここで批評家の態度の特徴に再び目をやるならば、ある興味深いことが見えてくるように思われる。批評家は、ドゥルーズに宛てた手紙で執拗に「白状」するようせまっていたのだった。ドゥルーズにとってそれは「公の場での告白」という発想にとらわれたものとして映っていた。事実、批評家の手紙は「高度な監視機構」(une haute surveillance) [PP: 13=14] だと形容されている。批評家は、ドゥルーズが内面に秘めているはずのものを解読したつもりになっており、それを暴き立てられると思っている。言い換えれば、批評家は、ドゥルーズという「箱」を凝視し、観察し、粗探しすることでその隠蔽された「内部」を「箱」の外へと引きずり出そうと目論んでいる。つまり、ドゥルーズにとって批評家は、本の二通りの読み方のうち、本を箱とみなしその内部を露呈させられると考える読み方をまさに体現する存在である。巷にあふれる言説を解釈し『アンチ・オイディプス』の解釈から得られた著者の意図と照合することで、ドゥルーズの隠蔽したい秘密を暴き立ててやろうとするその執拗さにおいて、批評家は「解釈症」を患っているのである。

批評家への手紙に関してもう一点注目に値するのは、「対話」に関する問題である。ドゥルーズが批評家との手紙のやり取りにおいて置かれているのは、その構造がもつ権力作用に警戒心を隠さなかった「対話」における応答者の位置である。さらには、当の手紙のやり取りが開始されたのは『アンチ・オイディプス』出版直後、ドゥルーズとガタリの著作が賛否両論をもって言論界に熱狂的に迎え入れられたタイミングである。つまり、ドゥルーズはまさに「自分を説明する」ことの困難な状況に置かれている。その最中で批評家は、質問者としてドゥルーズに内面を吐露するように迫るのである。

ドゥルーズは、「著者はつねに小さな秘密を持っている」という考えにとりつかれ「内面」なるものの存在を信じて疑わない批評家との「対話」の状況に置かれており、批評家の背後には

多数の潜在的な読者たちが待ち構えている。批評家との手紙のやり取りは公開されることが取り決められていたことはすでに見た。こうして批評家との「対話」に挑むこととなったドゥルーズが批評家に送る概念説明こそが、本の二通りの読み方だという点に注意したい。するとこの概念説明が果たす作用について次のように推察できる。すなわち、ドゥルーズが行なっていることは、批評家が気づかずに依拠している思考様式を取り出して、その対照的な思考様式との組み合わせにおいて一つ概念として創造し、浮き彫りにするという作業である。批評家が無自覚に従っている前提を相対化するような概念を提示するというこの応答は、批評家の姿を風刺的に描き出す寓話として機能する。

こうしてみると、「二通りの読み方」を批評家宛の手紙で論じることが、批評家の挑発的な問いかけがドゥルーズに依拠するよう暗に迫る議論の土俵を無効にする技法として一つの積極的な意義をもつのだという展望が見えてくる。閉じられた「箱」の「内部」を想定する批評家の執拗な「白状せよ」という要求に対して、ドゥルーズは「白状」する何かが存在するという前提に沿った応答をすることはない。ドゥルーズの行なっていることは、問いかけに対して一見無関係な内容を語ることで応答するというものである。それは他者とコミュニケーションをとり、より円滑な関係性を築いてゆくという観点からは、不適切な振る舞いのようにも映る。決して真摯な応答の仕方とはみなされないがゆえに、前出のハリスがこの手紙にドゥルーズの軽蔑めいた態度を見てとるのも不思議ではない。しかし、まさに同じやり取りをドゥルーズの論じる「対話」の問題を反映する事例として捉え直すならば、ドゥルーズの「一見無粋で的外れにも見える応答は、単なる彼の主観的な議論嫌いの問題へと矮小化できない射程をもつように思われる。つまり、いかに相手の問いや主張が先取的に設定する論理の前提に絡めとられることなく、むしろ攪乱し、そうした前提への読者の同一化を頓挫させる余地を作り出すか、という「折衝」の技法の一面を示すものとして理解できるのである。次節では、そうした攪乱を特徴付ける内実を確認しよう。

4. 「折衝」の技法としての実験

裏切り

前節末では二通りの読み方の前者と批評家の思考様式の同型性を指摘し、そのことがドゥルーズにとって批評家との間の「対話」構造を攪乱する鍵として理解しうることを指摘した。こうした攪乱の技法の一樣相をこそ、前述した「裏切り」(la trahison, trahir)に見いだすことができる。裏切りは「錯乱」(délire)に似ており、シニフィアンとシニフィエの結びつきを約束する整然とした秩序、すなわち「条溝、境界標識、土地台帳」からの「逃走」(une fuite)である [D: 51=73]。「裏切り者」は自らもその構造の中に組み込まれている当の秩序から逃走することによって、秩序の盤石な有機的連関に風穴をあける³。英米文学の登場人物であれば、小説の支配的なプロット——読者が当然のように期待する話題の展開、登場人物の内的苦悩・野心というお約束——に従わないことによって、小説の条理を攪乱する。小説の注釈者たちはそこに著者の意図、登場人物の意図を読み込むことができなくなる。こうした「裏切り」は、体制の転覆の先に新たな秩序の建設とその主導権の奪取を議論する「いかさま師」の所業とは対照的である。

「いかさま師」が最終的に堅固な秩序とその支配を所望するのに対して、「裏切り者」は自らの行為の帰結をむやみに制御しようとししない。「諸々の帰結ないし効果の技法」[D: 83=117]であると言われるように、蓋を開けてみるまでその裏切り行為がいかにか作動するかはわからないし、それを統制しようともしないのが「裏切り者」の流儀である。

作動配列

こうして「裏切り」は徹頭徹尾、統制された秩序を攪乱し実験的な場に変えてしまう行為として特徴づけられる。それを最も端的に示すと同時に、「裏切り」と本の後者の読み方の密接な連関を示唆するのが「作動配列」(un agencement)という概念である。

「作動配列」とは異質な項どうしを「創造的な『と』」(ET créateur) [D: 73=103]を通じて互いに組み合わせることによって新たな単位を生み出すことである。ドゥルーズは命題の繫辞「である」êtreの活用形 est と等位の接続詞 et の発音の語呂合いを利用して、論理的な命題を完結させる繫辞の有機的秩序から、複数の異質な語を次々と結びつけてゆく繁殖性を伴ったくと et の経験論へと舵を切る。彼は「いかさま師」のように体制的秩序に固執せず、また本を有機的に連関し完結した全体とみなしてその内奥の秘密を探ろうともせず、むしろ軽やかに異質な項どうしの「共に機能すること」(co-fonctionnement) [D: 65=92] を発明することを提唱する。そうした「作動配列」による偶然の組み合わせにおいて諸々の概念や事物は新たな関係を形成し、その連関の中で新たな自らの「力能」(puissance) [D: 84=119] を見いだす。

意図せざる接続による新たな力能の発揮という点において、本の二つ目の読み方は「作動配列」を前提とした読み方だということになる。本という機械がその都度の組み合わせにおいていかに機能し何をなし得る(pouvoir)のかという観点に立つのが強度の読み方であったからである。そしてドゥルーズに従えば、「作動配列」は何も本と読者の関係には限られない。執筆者と本との関係もまた、「作動配列」として捉えなければならないというのである。

著者は自らの登場人物と同一化したり、あるいは私たちが登場人物や、登場人物が担う観念に同一化させたりすることもあれば、その反対に、自分と私たちが観察し、批判し、引き伸ばせる隔たりを導入することもある。だがそれは良いことではない。著者は一つの世界を創造するのだが、創造されるために私たちが待っているような世界はないのだ。同一化も隔たりもなく、近さも遠ざかりもない。というのも、そうした場合のいずれにおいても、ひとは…のために [pour]、あるいは…の代わりに [à la place de] 語るよう仕向けられるからである。その反対に、とともに語り [parler avec]、とともに書かなければ [écrire avec] ならないのだ。[D: 66=92]

執筆者は自らの言わんとすることを登場人物の内面や登場人物の作品内での体験の描写を通じて表現しているのだと、そう考えることはありふれた発想である。ところが執筆者と本のそうした関係は、執筆者の意図を本に「代弁」させる——…のために、あるいは…の代わりに語る——ことを前提している。これは実のところ、テキストを通じて執筆者の内面を凝視しようとする本の一つ目の読み方と相通するものである。しかし追求されるべきは何か「とともに」

(avec)語るようなあり方であるという。執筆者は自らの置かれた外界環境に集う多様な事物との「作動配列」に置かれるだけではなく、自らが作り出そうとする作品、その作品世界、登場人物、描写とも「作動配列」するのであり、必然的にそれら「とともに」書くことになるのである。このことは、現在進行形でテキストや概念を生み出しつつ、当の生み出されたそれらによって自らも触発されるという動的な相互作用についての表現として読むことができる。また、言葉や概念はその使用者の制御を離れて自律性をもつということでもある。さらには、執筆者を介して作品内の世界と作品外の現実を横断する「作動配列」の可能性をも示唆するものであり、このことは本の有機的秩序の閉じられた「内部」という想定を挫く。先に引用した「書物をズバズバに切り裂く各々にとっての出来事」とはこうした「作動配列」の機能の謂いである。

ここまで確認してきた「裏切り」と「作動配列」概念を踏まえて、本の読み方を語る戦略に立ち戻ろう。内面の白状を迫る批評家に対するドゥルーズの応答は、先述の通り一見すると真摯なものではない。彼は英米文学の登場人物のように、批評家との直接論争から「逃走」し、質問への応答という期待や、質疑応答をそれたらしめる秩序を「裏切る」のである。とはいえドゥルーズは一切の応答を拒否するのではなかった。彼は、内面の白状という期待からは身をそらしつつ、本の二通りの読み方という一見無関係な話題を持ち出す。これは、批評家を風刺する概念を送り返すことによって、批評家と批評家によって体現される概念を、あるいは「内面への問い」と「内面という想定を相対化する概念」を出会わせる「作動配列」として捉え返さうものではないだろうか。

裏切りは「対話」の条理を攪乱し、質問者である批評家を、さらにはいずれこの「手紙」というテキストを読むであろう人々を混乱させる。そうして初めてドゥルーズには、問いの背景にある自明の前提を脱臼させ、それが実のところ恣意的な前提なのだということを露呈させる余地が生まれる。つまりドゥルーズの思想に照らせば、一連の彼の言辭は「対話」に内在的な権力作用への抵抗の行為であり、批評家が代表する支配的な前提を攪乱する試みである。こうして「対話」の力学を「実験」へとすり替えることこそが「折衝」であると、そう考えることができるだろう。

3節と4節を通じて、「手紙」におけるドゥルーズの言辭が「対話」を「折衝」へと折り返す営みとして捉え返されること、その折り返しを構成するのが異質な項を結びつけ条理を攪乱する実験であることを明らかにした。最終節では結論として、「手紙」に関する上記の読解を敷衍し、他者との関係性について「折衝」に固有の教育的な含意を導出するべく、ドゥルーズの「概念の教育学」を参照する。

5. 概念に媒介される実験的教育へ

ドゥルーズはその思索の若年期から晩年に至るまで、哲学の仕事概念の創造に見出していた。そして最後の著作『哲学とは何か』において、概念創造のあり方を「概念の教育学」(une pédagogie du concept)という術語で表現するようになる。「概念の教育学」とは、概念創造が普遍性においてではなく、「特異であり続ける諸契機」、すなわち一回きりの偶然として生じる都度の状況を通じてなされると考える態度のことである [QP: 17=25]。ゆえに概念は万人の表象に普遍妥当する本質的秘密ではなく、日常生活の経験の中で新たに立ち現れる「出来事」であ

る [QP: 26=40]。

教育哲学者ポール・スタンディッシュの解釈に従えば、「概念の教育学」はその二重属格に着目して読まれうる。つまり、属格「の」(de)によって接合された「概念の教育学」は、主体が概念を動員して他人を教育することのみならず、自ら創造した概念によって教えられるということをも含意する [Standish 2008: 224]。後者の含意を強調するスタンディッシュの解釈は概念を「出来事」だとするドゥルーズの論旨に見合うと同時に、以下論じることと関わるが、概念創造があえて「教育学」という語彙で語られる理由を検討する助けとなる。

この指摘から得られる示唆は、概念はその創造者や使用者の制御を離れて独自の権利において機能するということである。概念は単なる透明な表象ではなく自律性ないし物質性を持つ。このことは概念をシニフィアンとみなしその固定されたシニフィエを探る態度や、概念の背後に隠された秘密を暴こうとする解釈症とは相容れない。なぜなら概念はその自律性において創造者の手を離れるからである。ドゥルーズの概念は、ドゥルーズが創造したという刻印は携えつつもドゥルーズの意図の内に封じ込められるものではない。そしてテキストや言葉の執筆がその都度特異な概念創造を伴うのであれば、当のテキストは予期し得ないニュアンスとその効果を発揮する。

「もう別の場所に移っている」(on est déjà ailleurs) [PP: 19=25] という批評家への言葉が示唆するように、執筆物は概念創造の場となり、ドゥルーズを予期せぬ関係へと連れてゆく。それは新たな出来事、人々、概念との「作動配列」である。それによってドゥルーズも読者も、また創造された当の概念自身も、自らの新たな能力を発揮する機会を得ることになる。ドゥルーズにとって執筆は一つの実験であり、それは自ら創造したものによって教えられる——何が教えられるかの制御された正答は存在しない——実験である。つまり、「概念の教育学」は、「作動配列」による自己の能力の増大という思想を、「作動配列」に先立ち、あるいはそのさなかで遂行される概念創造の営為に焦点化して、再定式化した語彙として理解されうる。「とともに」(avec)の思想が示唆するように、概念の創造者は自らの創造物に影響を受け、教えられる。

では、批評家とドゥルーズの関係にとって概念の自律性はどのような意義をもつだろうか。ここで両者のやりとりが直接対面ではなく書簡という物によって隔てられていることに着目したい。この書簡の物質性は、透明な意思疎通の道具としてではなく批評家とドゥルーズに並ぶ自律的な第三項として現前する、概念のありようを象徴的に示す。概念の一人歩きを許すことによって、概念の自律性を捉え損ねている批評家の策略を攪乱する余地が生じる。概念という不穏分子が作り出す隔たりは、「対話」をそれたらしめる有機的秩序に潜在するひずみであり、直接的コミュニケーションという想定が見落としているものである。ならば、概念の自律性は「対話」を「実験」へとすり替える「折衝」を可能にする理論的素地であると言えるだろう。

批評家が実際に「本の二通りの読み方」という概念に何かしら触発され、自身の思考様式を内省するに至ったかは知る由もない。しかし、批評家-本の読み方という「作動配列」と接続し、おのれの能力を増大させる可能性は、何よりもこの手紙の読者へとひらかれている。ここには二つの含意があり、両者は同じ事態の両面をなす。第一には、批評家の問いが設定する前提に読者が無批判に従属してしまうことへの抵抗の可能性がひらかれている。流布している思考枠組みに自らの思想が飲み込まれてしまう「対話」の中に置かれて、ドゥルーズは期待される「対

話」の作法から「逃走」することによって読者の期待を裏切る。読者の中には当然ながら、参照したハリスのように否定的に受け止める者もいるだろうが、これはどのような形であれ読者の条理への期待を攪乱し着目させたということには違いなく、創造的な論争の参照点になることに成功した印であると考えられることも可能であろう。それは、批評家に迎合した応答をしていたならば閉ざされていたであろう、「折衝」の可能性である。第二に見出される含意は、そうした「折衝」に伴う教育的意義であり、これは「折衝」に伴う「概念の教育学」として理解できる。読者はこの「手紙」に何かしら響くものがあれば「手紙」との「作動配列」の中で新しい力能を得ることができるし、さもなければ別の本に取り掛かれればよい。あるいは、ドゥルーズが仕掛ける「折衝」によって、概念との「作動配列」に巻き込まれ、流布している思考枠組みとは異なる思考を獲得するならば、それもまた一つの教育の姿として捉えられるだろう。こうして概念の自律性に支えられながら、本の内外へと「作動配列」が増殖してゆくとするれば、本や概念との組み合わせにおいて力能を得た読者が新たに生み出すものが、そうした実験的な関係の中継地点としてまたさらなる「作動配列」を可能にしてゆくだろう。ここに、概念を媒介として、「対話」や直接的コミュニケーションから逸脱するように伝播してゆく教育的関係を見てとることが可能である。本稿もまた、そうした関係の中継地点の一つであろうとするものである。このようにして、概念を通じて多様な関係が紡ぎ出され、実験的な教育が響き渡ってゆくのである。

注

1. 論集『折衝』(Pourparlers : 1972-1990)は、邦訳では『記号と事件』と題されている。
2. 例えば森田裕之は教育学の学的不備を問い直すプロジェクトを実行するためにドゥルーズとガタリの著作群に訴えるが、ドゥルーズとガタリの著作構造の独創性を裏打ちする思想として「本の二通りの読み方」を参照する〔森田 2012: 27-30〕。
3. ハリスの論文は、英語圏におけるドゥルーズ哲学の教育学への援用の傾向について緻密な分析・整理を行うものである。その一方で「手紙」については何ら分析を加えぬままにドゥルーズの言辭を「軽蔑的で人を見下すような」態度と断じている。このハリス自身の態度の落差はより一層、ドゥルーズの人間性について固定されたイメージが流布していることを窺わせる。
4. ドゥルーズによれば「逃走」は世界への責任を放棄する卑怯なことではなく、「逃走ほど行動的なものはない」〔D: 47=67〕という。ドゥルーズはときにその哲学の非政治性が指摘されることがあるが、往々にしてその論拠とされるのは政治的に行動し改革を促すような行為者性の次元が欠如しているというものである。「逃走」という概念にそのような政治主体の姿を見てとることはできないかもしれないが、この齟齬は翻って、もっぱら能動的に関与する強い主体の存在を基準とするような政治観とは異なる政治観をドゥルーズ哲学に見いだしうる傍証であるかもしれない。

参考文献

引用は〔著者名 出版年: 頁〕で示す。邦訳の存在する外国語文献については〔著者名 原典出版年=邦訳出版年: 原典頁=邦訳頁〕とする。ドゥルーズの著作の引用参照は以下の書誌情報末尾の略号で示し、〔略号: 頁〕で示す。邦訳があるものについては最大限参考にさせていただいたが、訳文は文脈などに即して適宜変更している場合がある。

Badiou, Alain, *Deleuze: "La Clameur de l'être,"* Paris: Hachette Littératures, 1997. =アラン・バディオ『ドゥルーズ 存在の喧騒』鈴木創士訳、河出書房新社、1998年。

Deleuze, Gilles, *Proust et les signes*, 4^eéd., Paris: PUF, 2010 [1976]. =ジル・ドゥルーズ『プルーストとシーニュ』宇波彰訳、法政大学出版局、1983年。: [PS]

Deleuze, Gilles, *Pourparlers : 1972-1990*, Paris: Édition de Minuit, 1990. =『記号と事件——1972-1990年の対話』河出文庫、2007年。: [PP]

Deleuze, Gilles, et Claire Parnet, *Dialogues*, Paris: Flammarion, 1977, éd augmentée, 1996. =ジル・ドゥルーズ&クレール・パルネ『ディアローグ ドゥルーズの思想』河出文庫、2011年。: [D]

Deleuze, Gilles, et Félix Guattari, *Qu'est-ce que la philosophie?*, Paris: Édition de Minuit, 1991. =ジル・ドゥルーズ&フェリックス・ガタリ『哲学とは何か』財津理訳、河出文庫、2012年。: [QP]

Harris, David Ernest, "Applying Theory to Practice: Putting Deleuze to Work," *International Journal of Sociology of Education*, vol. 2, no. 2, 2013, pp. 142-146.

森田裕之『ドゥルーズ=ガタリのシステム論と教育学—発達・生成・再生—』学術出版会、2012年。

Standish, Paul, "Education Concept," in Paul Smeyers and Marc Depaepe (eds.) *Educational Research: the Educationalization of Social Problems*, Educational Research 3, Dordrecht: Springer, 2008, pp. 217-226.

Žižek, Slavoj, *Organs Without Bodies: On Deleuze and Consequences*, New York and London: Routledge, 2004. =スラヴォイ・ジジェク『身体なき器官』長原豊訳、河出書房新社、2004年。

(臨床教育学講座 博士後期課程3回生)

(受稿2017年8月29日、受理2017年10月20日)

概念に媒介される教育的関係性

—ジル・ドゥルーズの「口さがない批評家への手紙」に着目して—

松枝 拓生

本稿はドゥルーズの著した書簡「口さがない批評家への手紙」を、その構造と提示される概念に着目し再読解する作業を通じて、概念の自律性に裏打ちされた教育の実験性を明らかにするものである。当該の書簡は従来、ドゥルーズの主観的態度としての議論忌避と傲慢さの象徴として理解され、もっぱら一面的なイメージを再確認する手段としてのみ用いられてきた。しかし、支配的な前提の再生産という観点からなされるドゥルーズの「対話」批判を踏まえれば、書簡における彼の言辭は、「対話」の構造に抵抗する「折衝」の技法の実践として積極的に評価できる。固定的意味解釈ではなく、偶然的な触発の連鎖という観点からなされる彼の概念評価を経由することで、「折衝」の技法に内在する教育像を明るみに出すことを試みる。

Educational Relationships Mediated by Concepts: A Consideration of Gilles Deleuze's "Letter to a Harsh Critic"

MATSUE Takuo

This article discusses the experimental nature of education that is sustained by what this article calls the "autonomy" of concepts, through rereading of Gilles Deleuze's "A Letter to a Harsh Critic." This letter has been exclusively conceived as symbolic of Deleuze's subjective aversion to debates and his underlying arrogance, and has reproduced these one-sided views. However, his phrases in the letter can be reevaluated as a "negotiation" against the major language, in the light of his criticism of the power relations inherent in the structure of the "dialogue," which leads to the reproduction of prevailing assumptions. This article attempts to reveal a picture of education intrinsic to "negotiation" the key nature of which is found in Deleuze's thought of "a pedagogy of the concept."

キーワード：対話、教育関係、実験としての教育

Keywords: Dialogue, Educational relationships, Education as experimentation